

報告

インド国際アートイベント

「Face to Face with Master Artist- 2023」
における制作と実演

About the workshop at the international art event
“Face to Face with Master Artist- 2023” in India.

P29-36

木森 圭一郎

Keiichiro Kimori

造形芸術学科

1.はじめに

1-1. これまでのインドとの関わり

筆者とインドの関わりは2017年まで遡る。インド・ラジャスターン州ウダイプールに所在するアート団体「THE ART PIVOT（以下ART PIVOT）」の主催者Rajesh Kumar Yadav氏の企画した、国際美術展「FACE TO FACE : INDIA 2017 International Art Exhibition」に推薦され、同展に出品した事が契機となった。

その翌年の2018年には、ART PIVOTから「FACE TO FACE : INDIA 2018 International Art Festival」の参加アーティストとして推薦され、これを受諾。この時は所謂アーティスト・イン・レジデンス（滞在型制作）形式のイベントであった為、実際にウダイプールに赴き、現地で作品制作を実施した。

またその翌年の2019年には、自身が企画した国際展「ART AND FRIENDSHIP International Art Exhibition / Vol.1 India,Nepal,Japan（福岡アジア美術館）」に、美術家でもあるRajesh氏の作品を出品するなど、交流は続いた。

コロナ禍に突入した2020年においても関係は続き、Art Pivotの選定するArt Ambassadorに選定され、Art Pivotの企画する美術展に出品した他、2021年の12月には同団体が運営した「WORLD HERITAGE ART COMPETITION 2021-2022 INDIA」の審査員として公募作品の審査を実施した。



2018年「FACE TO FACE : INDIA 2018 International Art Festival」



2019年「ART AND FRIENDSHIP International Art Exhibition / Vol.1 India,Nepal,Japan」フライヤー



2019年「ART AND FRIENDSHIP International Art Exhibition / Vol.1 India,Nepal,Japan」公開制作の様子



2020年 Art Ambassador 認定証

2.Face to Face with Master Artist- 2023

2-1. イベント概要

企画名：Face to Face with Master Artist-2023

テーマ：Creative World @ Pacific

開催場所：Pacific College of Fine Arts
(インド・ウダイプール)

実施日程：2023年1月6～12日

主催者：Pacific College of Fine Arts

インド、ラジャスターン州ウダイプールに所在する総合大学「Pacific University」の美術学科「Pacific College of Fine Arts」にて、ワークショップの実施及び、国際芸術交流会の参加、展覧会の実施、各種式典への参加。九州産業大学 国際学会発表支援費助成。



Pacific College of Fine Arts外観



Pacific College of Fine Arts 講義室

A detailed event flyer for the 'Face to Face with Master Artists' event. The flyer features the logos of PCFA (Pacific College of Fine Arts) and Pacific University, Udaipur. The main title is 'CREATIVE WORLD@PACIFIC ART FESTIVAL FACE TO FACE WITH MASTER ARTISTS'. It lists the dates from January 6 to 12, 2023, and the venue at Pacific College of Fine Arts, Pacific Hills, Pratapnagar Extn., Airport Road, Debari, Udaipur - 313003. A grid of 15 small portraits of the participating master artists is shown. The event activities include Live Show, Art Work Shop, Art Interaction, Art Tour, and Music Fest. The flyer is curated by Rajesh Kumar Yadav, Director of Pacific College of Fine Arts, and THE ART PIVOT, INDIA. Contact information and a QR code are provided at the bottom.

A detailed event flyer for the 'Face to Face with Master Artists' event, similar to the one above but with a different layout. It features the logos of PCFA and Pacific University, Udaipur. The main title is 'CREATIVE WORLD@PACIFIC ART FESTIVAL FACE TO FACE WITH MASTER ARTISTS'. It lists the dates from January 6 to 12, 2023, and the venue at Pacific College of Fine Arts, Pacific Hills, Pratapnagar Extn., Airport Road, Debari, Udaipur - 313003. The flyer includes a list of activities: Live show, Art Work shop, Art Interaction, Art tour, and Music Fest. It is curated by Rajesh Kumar Yadav, Director of Pacific College of Fine Arts, and THE ART PIVOT, INDIA. Contact information and a QR code are provided at the bottom.

アートイベント告知フライヤー



Pacific College of Fine Arts校内

2-2. イベント詳細

2回目のインド・ウダイプル来訪となった今回のアートイベントは、「Face to Face with Master Artist- 2023」と題され、基本的には修士以上の芸術系学位所持者や、芸術系大学で指導にあっている人々が選出されている。合計15カ国17名のアーティストが参加しているが、一部のアーティストは時期をずらしてワークショップが実施される為、今回筆者が参加したワークショップには計12名のアーティストが名を連ねた。インド国内を除く参加国では、日本、フィリピン、イスラエル、韓国、チュニジア、バングラディッシュと6カ国のアーティストが参加している。



参加アーティスト

今回のイベントも2018年のインドにおけるアートイベントと同様、アーティスト・イン・レジデンスの形式であった。「Pacific College of Fine Arts」校内の教室に各参加アーティストが割り振られ、2023年1月6日～10日までの4日間、それぞれのアーティストの作品制作と並行して、主に学生を対象としたワークショップ（制作実演および解説）が実施された。

筆者のワークショップに関しては、基本的には以下のような手順にて実施した。

- 1、自身の制作実演を学生が見学
 - 2、制作実演を踏まえGoogle翻訳を活用した質疑応答
 - 3、2を踏まえた学生自身の制作・演習
 - 4、3の制作結果を踏まえた、補足的アドバイス
- *以降1～4の繰り返し

2で触れている様に、筆者は英語が不自由であるから、日本から持ち込んだパソコンをインターネットに繋ぎ、Google翻訳の音声翻訳機能を活用し、学生達の質疑に回答した。機械翻訳は、細かい部分では齟齬がある場合もあるが、その点に関しては、現場でお互いの手技を確認し合いながら、逐次修正し対応した。

今回のワークショップには12名のアーティストが参加したが、我々のアシスタントとワークショップの参加者を兼ねてPacific College of Fine Artsの学生が、それぞれに振り分けられた。学生は複数のアーティストを兼任する為、常時我々に張り付いているわけではないが、それぞれの都合の良いタイミングでアーティストの制作スペースを訪れ、制作を補助したり、ワークショップに参加していた。

筆者のワークショップに参加した学生は主に2名だが、通りすがりの見学者も希望があれば、その都度解説した他、

実際にワークショップに参加することもあった。



学生アシスタントのSoniさん（左）とVishakha（中央）さん

2-3. ワークショップの構想

筆者が今回、Pacific College of Fine Artsの学生に紹介した技法は、大きな分類では「ミクストメディア（混合技法）」という技法に分類されるものである。

これまで筆者はインド以外にも、複数のアジア圏におけるアーティスト・イン・レジデンス形式のアートイベントに参加してきた。初めて参加したのは2014年のマレーシアで催された「Sasaran International Art Festival 2014」であった。



Sasaran International Art Festival 2014 制作風景

そこで参加していたアーティストの多くは、チューブから絵具を出し描画するという一般的な描法によって制作していた。筆者は主催者から支給されると説明されていた、現地のアクリル絵の具の品質に懸念があった為、日本からテンペラ用の顔料と、アラビアガムや、アクリルメディウムといった展色剤を持ち込み、現地で混合し描画していた。

その中で知っていったのは、筆者がアートイベントに関わったアジア圏の美術家の多くが、メディウムについてや、描画面に透明な層を重ね塗りする工程の、視覚的な効果についての問題意識が薄いという点である。

その後もいくつかの国々のアートイベントに参加したが、ベトナムを除くほとんどの国々のアーティストがこの傾向にあった。この件についての良し悪しはここでは論ずる気はないが、筆者がミクストメディア的な技法に習熟していく過程で自然に獲得した問題意識は、より長く創作に携わるアーティストや、アートビジネスで既に成功を取める諸外国のアーティスト達との差を埋める、重要な要素になるのではないかと感じ、これ以後海外のアーティスト・イン・レジデンスに参加する際には、日本から顔料とメディウムを持ち込む様にしている。

今回もその例にもれず、日本から画材を持ち込み、ミクストメディア技法を軸にしたワークショップを実施した。

2-4. 実施したワークショップの詳細

前述の構想や現場の状況を踏まえ、筆者が実施したワークショップのねらいは、大きく分けて以下の4つである。

ねらい①

絵具がどのようにして作られているか体験する

ねらい②

伝統的な金の下地としての「赤」とその効果を体感する

ねらい③

既定の形を定めない描画法の提案と実践

ねらい④

“透明”という要素を認識し、絵具として活用する

ここからは各ねらいの詳細について解説していく。

2-5. ねらい①「絵具がどのようにして作られているか体験する」について

現在、水彩、アクリル、油彩等様々な絵具が市販されているが、どのような絵具でも大雑把には以下のような構成によって作られている。

顔料・染料+展色剤(メディウム) = 絵具

この事は美術に携わる人々の多くが知識としては知っているものの、チューブ絵具が市販されている為、あえて顔料とメディウムを混合して描くようなアーティストは、筆者が触れ合ったアジア圏の人々の中には居なかった。これは推測だが、このような絵具の材料学的な問題は、アジア圏の美術系大学においては現代美術領域ではなく、ヨーロッパのテンペラや日本画の様な、より伝統的で表現領域が限定される範疇で活用されているのではないだろうか。故に、多くの場合で現代美術家を対象としている、アーティスト・イン・レジデンスでは、筆者が接触することが少なかったのではないかと推察している。また伝統的な絵画技法は、依頼していた画材がワークショップ開始時に支給されない等、気候・制作環境的なものも含めて予想外の事態が起りやすい、アジアのアートイベントにおいては相性が良くないことは確かであり、母国では伝統絵画を専門としているアーティストも、アートイベント期間中の滞在制作では代替技法で制作している場合もあるだろう。

筆者の活動領域は、広意の現代美術に含まれるが、修士過程でヨーロッパのテンペラ技法(卵と酢を混ぜたものを

メディウムとして使用)を学習した他、学部の初期の段階で「日本画」の画材の活用(動物性のコラーゲンである膠をメディウムとして使用)の基礎を学んだことで、絵具自体を作る経験をしており、それが現在のミクストメディア的技法の発想の骨子となっている。これらの方法論に、現代的なメディウムを組み合わせたのが、筆者のミクストメディア技法である。

これらの背景を踏まえ、ワークショップでは次の様に解説した。

- 今回は紹介する技法はチューブから色を出すのではなく、顔料とアクリル性のメディウムを混合し描画していく。
- この技法のメリットは、絵具のメディウムと顔料のバランスを自ら調整することができることである。
- この様に絵具を作って描画する技法は、15世紀ヨーロッパのテンペラや、日本の「日本画」にもみられるものである。

2-6. ねらい②「伝統的な金の下地としての「赤」とその効果を体感する」について

中世ヨーロッパのキリスト教絵画における金箔背景テンペラ画や、日本の漆工芸の蒔絵には赤い色の下地が活用されている。金箔背景テンペラの下地には、通常赤い砥粉¹が使用され、蒔絵の場合は漆と弁柄(ベンガラ)を混合したものが活用される場合がある。筆者は、比較的入手が容易な弁柄を金色の下地に使用している。

弁柄はベンガル、つまり現在のインド西部とバングラデシュを含む地域を指す語であり、翻ってそれを顔料として使用した市販の絵具はインディアンレッドと呼称される。

金の下地としての赤は「金の発色を際立たせ²」ることが知られるが、これまでの自らの絵画制作の実践から、純金箔を置かない偽金粉(真鍮の他、化学的に合成された金色を含む)を用いた場合においても、その下地に赤色地を採用することは、金らしい色味を表現する上で有効な工程であることが分かってきた。

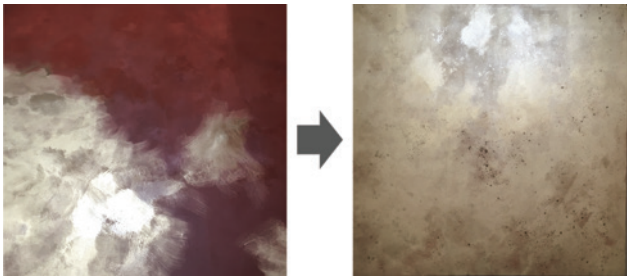
この点を踏まえ、ワークショップでは次のように解説した。

- この赤い色の粉は「インディアンレッド」として市販されているものであり、酸化鉄を使用した顔料である。



赤い粉が弁柄

b、次のプロセスで、この赤い下地の上に、偽の金粉とアクリルメディウムを混合したものを塗り重ねる。



2-6-b. 制作工程イメージ

c、この工程はヨーロッパの金地背景テンペラ画や、日本の伝統的な工芸品に用いられている技法を参考している。

d、つまりこの技法は、古典的な技法に現代的な材料を用い応用した技法である。



制作実演の様子



筆者が制作した下地



学生達が制作した下地

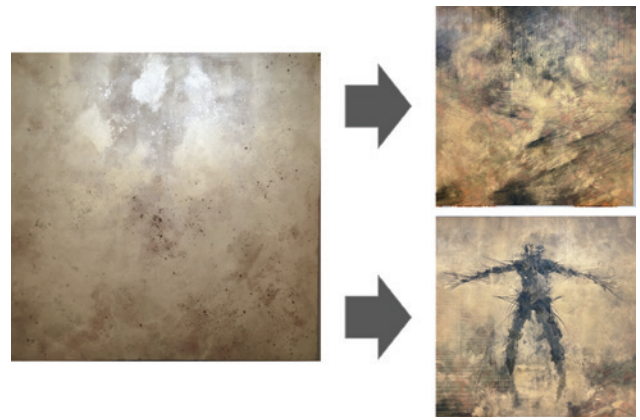
2-7. ねらい③「既定の形を定めない描画法の提案と実践」について

具体的な形態を描く技能は絵画・イラストレーションにおいては基礎的素養であり、表現として最も一般的な方法でもあるが、今回のワークショップでは描き出しの段階では図案を定めず描くことを提案した。

つまり描画という行為そのものや、その行為の過程で自らの造形観に問いかけ、自然発生的に何かしらの具体像が画面上に浮かび上がっていくことを求めたのである。

ワークショップでは次の様に解説した。

a、自身の作品制作においては、最終的に人物のシルエットが形象として描かれることが多いが、あらかじめその形態を目指している訳ではない。創造的な追求の結果、具体的な形象が現れない表現となっても、自らの行為の結果を肯定すること。



2-7-a. 制作イメージ

b、つまり今回のワークショップにおいて優先すべきは、具体的な形象が描けるかではなく、描画という行為の中で、自らの造形観に問いかけることである。

c、またその問いかけが、自らの描画によって視覚的に鑑賞者に認識されるように創意工夫することを求めている。



下地

下地に加筆

更に加筆

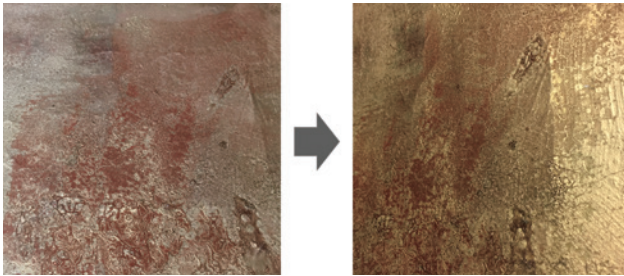
2-7-c. b. 学生の制作過程

2-8. ねらい④「透明」という要素を認識し、絵具として活用する」について

既に述べた「アジア圏の美術家の多くが、メディウムについてや、描画面に透明な層を重ね塗りする工程の、視覚的な効果についての問題意識が薄い」点を踏まえ、透明な層の視覚的な効果や“透明”という要素を絵具（描画材）の一種として認識し活用する描法を紹介した。

ワークショップでは次の様に解説した。

- a、半光沢の描画面と光沢のある描画面（クリアメディウムを表面に塗布）を、それぞれ実演し描き分け、その違いを視覚的に認識する。



2-8.a. 参考画像：半光沢（左）、光沢（右）

- b、クリアー色（クリアメディウム）を先に塗布し、乾きかけの状態の表面に顔料を乗せる場合の色味（下図2-8-b：赤丸部）と、メディウムと顔料を混合し描画する場合の色味（下図2-8-b：緑丸部）については、特にその差が明瞭である。



2-8.b. 参考画像

3. 成果と今後の展望

筆者自身の作品に関しては制作工程を示しつつ、4日間のワークショップで2作品を完成させ、Pacific College of Fine Artsの学内ギャラリーに他の参加者の作品と共に展示された。



展示の様子

今回の実施したワークショップと制作作品はPacific College of Fine Artsに高く評価され、今後の継続した国際交流が打診された。

具体的な内容については今後精査と擦り合わせが必要であるが、本学とPacific College of Fine Artsとの、学校・学科単位での交流に繋がっていく様に力を尽したい。



閉会式の様子

4. 制作作品の詳細



タイトル：肉体概念-インドの力
サイズ：4×4フィート (121.92×121.92cm)
技法：混合技法



タイトル：肉体概念-ソニの腕
サイズ：4×4フィート (121.92×121.92cm)
技法：混合技法

-
- 1 紀井 利臣 『黄金テンペラ技法：イタリア古典絵画の研究と制作』P36
 - 2 同上